

國學院大學學術情報リポジトリ

ギラルドゥス・カンブレシスと「ブレコン大助祭問題」(II)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000993

〈論説〉

ギラルドゥス・カンブレシスと「ブレコン大助祭問題」(Ⅱ)

永 井 一 郎

目次

- I はじめに
- II 史料
- III 「ブレコン大助祭問題」の原因
- IV 発端（以上、64巻2号）
- V ギラルドゥスの主張（以下、本号）
- VI 甥たちの主張
- VII 結果
- VIII おわりにー「ブレコン大助祭問題」

V ギラルドゥスの主張

「ブレコン大助祭問題」はどのような問題だったのか。一般的に言って、ある問題の本質を明らかにするためにまず問題の具体的経過を追い、そこで浮かび上がってくる重要な論点を整理、究明するという方法がとられることが多いが、この「問題」の史料状況はこうした方法を許さない。そこで、第5～第7節では次善の策を試みることにした。具体的には、この第5節でギラルドゥスが「問題」発生後数年間にわたりどのような行動や主張を重ねたのか、史料に即して確認し、第6節で相手方、すなわち、甥、その補佐役ウィリアム、セント・デイヴィズ司教ジョfreyについても同様な確認をして、最後に第7節と第8節で「ブレコン大助祭問題」とは何であったのか、推定してみる。不充分

であってもこのような方法をとれば、強いバイアスのかかったギラルドゥスの記述から少しでもバランスの取れた「問題」像が浮かび上がってくるのではないかと私は考えている。

『二人の鑑』でギラルドゥスは大きく分けて4点の主張をしている。

第1の最も重要な主張は、これまで繰り返し紹介したように、ギラルドゥスがカンタベリー大司教と1203年に結んだ「約束」を甥やその支持者たちが無視し、ブレコン大助祭職禄のうちで「約束」が定めている自分の取得分を奪い取ったという点である。ここでギラルドゥスが問題にしているのは、「約束」を構成する2つの要素のうちのいわば裏側の取り決めである。すなわち、彼は甥が大助祭の権限と職禄を正式に授与されているという点は軽視して、職禄のかなりの部分を自分が取得するという点に焦点を絞っている。この時期の彼にとって、著述に専念しながら老後の生活を享受できるの収入が何よりも重要だったのであろう⁽¹⁾。

収入源に関してギラルドゥスが甥たちを非難している事例を3つ挙げる。なお、本節以降で『二人の鑑』から多くの記述を紹介するが、原文をすべて和訳するのではなく、要旨を記して、その中で重要な部分だけを和訳引用することにした。ギラルドゥスの文章はしばしば多くの付随的説明を含む長文になっており、私の語学力不足も手伝って、全文を和訳するとかえって分かりにくくなったり、引用の目的がぼやけてしまう場合が少なくないからである。

(V-1) 私が先ごろアイルランドに滞在していた時のことであるが、セント・デイヴィズ司教ジョfreyは「私が長年大助祭として享受してきたマスリー (Mathry) 所領の収入の一部、すなわち、私が正当に所有してきた職禄の一部とこの〔所領の〕収獲物〔から納められる〕十分の一〔税〕を突然差し押さえた。」しかも、この決定は私ないし私の代理人が法場に召喚されることなく、まったく不当に強行されたのである⁽²⁾。

(V-2) 甥とウィリアムはブレコン「大助祭配下の教会に対する全ての権限だけではなく、私がサンズウィに建てた家を占拠し、さらに、この地の所

領さえも私から奪い取った。」⁽³⁾

(V-3)「私は〔ブレコン〕大助祭の権限や職禄、また、〔テンビー (Tenby)〕教会から〔得ていたものを合わせて〕、50 マーク以上〔の収入〕を失ってしまった⁽⁴⁾。

まず、(V-1) ～ (V-3) の所在と年代についての説明をしておこう。(V-1) と (V-2) はサンソニー修道院長宛の手紙(『二人の鑑』の付随部分、第7の手紙)に記されているもので、修道院長に対して自分が大きな損失をこうむったと嘆いている部分である。この手紙は1213年ころ、したがって、「ブレコン大助祭問題」をめぐる争いでギラルドゥスの敗北が決定的になった段階に書かれたと推定されている。しかし、記されているのは「問題」発生直後の出来事であり、特に(V-1)はリヒターが「問題」の発端を示すと考えている記述である。(V-3)は司教ジョフレイに宛てた手紙(同上、第6の手紙)からの引用で、これも「問題」の帰趨がギラルドゥスにほぼ見えていたと思われる1211年ころに書かれたものである。

次に、上記3史料が言及している収入源について説明する。ここでギラルドゥスが甥たちによって奪われたとしている職禄は、マスリー所領、サンズィウ教会の所領、テンビー教会からの収入である。『二人の鑑』全体を見ても彼が失った職禄はこの3つで尽きており、中で最も重要だったのはマスリー所領からの収入であったと推定されている⁽⁵⁾。総額は(V-3)に50 マーク以上と記されている。内訳は不明だが、後の紹介する史料(V-5)はサンズィウ所領からの収入を10～15 マークとしている。

これら3つのほかにギラルドゥスが個人的な収入源をもっていたかどうかはわからないが、あったとしても、大きな所得をもたらすものではなかっただろう。彼は末弟で、聖職に就いたこともあり、父から所領を相続していない。前節で紹介したように、1208年に司教ジョフレイからセント・デイヴィズまで来てくれるよう要請された時に、彼は取り返す可能性のある金額とリンカーンからセント・デイヴィズまでの旅費を比較して、直接司教に会って要求するのを断

念している。彼がこのチャンスを生かして司教の意図を確認しなかったことが「ブレコン大助祭問題」で後手に回る一因になったのだが、その理由は金銭的な問題であった。おそらく大助祭辞職後の彼はさほど裕福ではなかったのだろう。

1208年以後のギラルドゥスにとって上記3つの収入源が決定的な重要性をもっていたことは、収入源を奪った甥たちを盗人と決め付けている点でもうかがわれる。以下2つの事例を挙げるが、同様な非難は『二人の鑑』に繰り返し出てくる。

(V-4) お前 [=甥] は父から受けついだ性格を捨て去り、母の性格の悪しき半面を引きずって成長したため、「盗みといういとうべき犯行によって、許されることのない罪を負うことになった。しかも、[お前の犯行は] 親族である私の利益に反するものであったから、二重にいうべきことであった。」というのも、お前は私がかつて勤勉を重ねて入手したマスリーの職禄やサンズィウ教会とその土地を、お前にとって父親以上の存在である叔父、すなわち、私から盗み取ったからである⁽⁶⁾。

(V-5) お前が私から引き継いだサンズィウの職禄をウィリアム・ド・カペラが勝手に管理し、収入の多くを私物化した。その一方でウィリアムは私に対して、同地から私に送る金額を減らさざるをえないと伝えてきた。ウィリアムはこの夏家族とともにサンズィウに長期滞在しており、この間教会の収入を消費していたのである。「彼らは[教会所領の] 管理者ではなく、詐欺、窃盗による消尽者となったのである。」その結果、この私の所領は平年作であれば少なくとも10~15マークの収入をもたらし、時としてこれを超える年もあったのだが、今年はすべてを合わせても5, 6マーク分の収穫しかないと管理者[ウィリアム] が言ってきた。みな大食漢になったに違いない⁽⁷⁾。

「お前」という表現からわかるように、(V-4)、(V-5) とともに甥に宛てた手紙(それぞれ『二人の鑑』中核部分、第1, 第2の手紙)からの引用である。

(V-4) は、甥を盗人と決め付けているなど激した表現を使っていることから判断して、最初にギラルドゥスが甥に送ったオリジナル手紙には含まれておらず、彼の主張が無視されて怒りが積み重なった比較的遅い時期に書き加えられた可能性が高い。(V-5) は、内容がギラルドゥス不在の時期の出来事であり、彼が「問題」に気づいた時から知っていた可能性が高い。また、皮肉な表現を使うなど、余裕もうかがわれる。おそらくオリジナル手紙に記されていた部分であろう。

ギラルドゥスが、大司教との「約束」を充分承知しており、したがって、甥の側にも論拠のあることを分かっているながら、(V-1) ～ (V-5) のような激しい表現を使って一方的な主張をしているのはなぜか。彼の生来の性格ゆえと解することも可能であるが、むしろ、それだけ彼が追い詰められていたからではなかろうか。

ギラルドゥスの第2の主張は甥の大助祭任命に関するものである。甥が現在手にしている職禄はギラルドゥスの好意によって得られたものであるにもかかわらず、自力によって獲得したかのように振る舞い、人びとに誤った情報を広めているというのである。一つ事例を挙げよう。

(V-6) 昨年ソーンホルム (Thornholm) 修道院教会の参事会員がお前にむかって、私がお前に大きな恩恵をほどこしたとほめた時に、お前は次のように言い返した、と私は聞いている。「叔父ギラルドゥスは私に何の恩恵も与えていない、むしろ逆に、叔父は私から自分のものを奪い取ろうとしているのだ」と⁽⁸⁾。

これは『二人の鑑』の中核部分第1の手紙に含まれる記述であるが、オリジナル手紙に記されていた可能性は少ないと思われる。言及されている出来事はギラルドゥスと甥との対立が人びとに知られるようになった後のことと理解するのが自然である。

第2の主張から、甥がギラルドゥスに対し恩を仇で報いたという非難が出てくる。

まず、彼の言う恩と仇について説明しよう。ギラルドゥスによれば、彼は死を間近に控えた兄フィリップ（Philip）から息子ギラルドゥスを一人前の聖職者に育ててほしいと懇願されたので、兄の願いが実現するよういろいろな指導や助言を甥に与えてきた。1203年に自分の辞任によってブレコン大助祭の職位が空くことになり、甥がまだ大助祭にふさわしい学識と経験をつんでいないことはわかっていたが、最終的には後継者となることに賛成した。これだけの恩恵を受けているのだから甥は自分に敬意を払い、自分のために尽くすべきなのに、むしろ逆に自分の収入を横領した。しかも、甥はとがめられても謝らないばかりか、ギラルドゥスが甥の取得すべき収入を私物化していると主張した。これはまさに恩を仇で返す行為にほかならない、というのである。

ギラルドゥスが甥の忘恩を非難するときの口調は厳しい。3つ事例を挙げよう。

（V-7）私はかつて甥とともに食卓をともしながら食物と教育を与えてやった。それだけでなく、彼を惨めな貧困から救い出して豊かな収入を得るまでに昇進させてやった。にもかかわらず、「甥が私にこれほどの悪意を示し、あえて恥ずべき仕打ちを返したのは」驚くべきことである⁽⁹⁾。

（V-8）「お前を〔大助祭に〕昇進させてやったすぐあとに、私は新しくお前のための〔教育〕プランを作り、お前が適切な教師の下で学習するよう手はずを整えた。」私は2年間滞在していたアイルランドから手紙や使者を送るたびに、いつも同じプランを重ねて提示し、学習が重要だと教え諭した。さらに、文書をしたため、忠告の言葉まで付け加えた。にもかかわらず、アイルランドから帰国してみると、お前はプランをまったく実行していなかった⁽¹⁰⁾。

（V-9）甥の大助祭就任に賛成したのは、何よりも「私の長兄である甥の父親が優れた人物で、その父親が遺言で息子をよろしく頼むと涙とともに懇願したからである。」兄が息子を全面的に委ねてくれたので、私はいろいろな時や場で甥が昇進できるよう配慮してきた⁽¹¹⁾。

(V-7), (V-8) は『二人の鑑』の中核部分第1の手紙から, (V-9) は同じく第2の手紙からの引用である。いずれもオリジナル手紙に含まれていたものかどうか推測する手がかりはない。

なぜ甥は盗み同然のことをし、しかも恩を仇で返すような行動を繰り返すのか、こう自問してギラルドゥスは第3の主張、すなわち、甥の悪しき性格は母方血統から継承したものだという理屈を提示する。甥の父親はギラルドゥス自身と同様、名誉を重んじるジェラルディン一族に属しており、甥が父の血を強く引き継いでいれば忘恩に走るはずがない。叔父である自分に多大な迷惑をかけてまで自己の利益を追求するのは、母方血統の影響が強いからだと言うのである。2つ事例を挙げよう。

(V-10)「お前の幼年期の特徴が賞賛に値しなかったことを考えると」、すなわち、お前の首が不安定であちこち動き回ったこと、お前の頭が長く、高かったこと、お前の目が胡散臭く動き回ったこと、お前が皮肉っぽい口をしていたこと、お前のモラルが腐っていたことを思い浮かべてみると、これらはすべてお前の父親の資質とは正反対である。実際、お前の粗野な性格は、私の性格、お前の父の性格、さらには、お前の兄弟のそれともまったく違っている⁽¹²⁾。

(V-11)「お前の嫌味な言葉、あざけりの言葉についてなんと言ったらよいのだろうか。[私の忠告によっても] この悪しき性格を取り除いて、鍛え直すことはできない。」お前の父親は嫌味を言うような人ではなかった。それに反して、お前の[母方の] いとこたちは腐った性格をもち、いつも嫌味やあざけりを口にしている。お前の悪しき性格が母方の血統、バスカーヴィル家に由来することは明らかである⁽¹³⁾。

こうした決め付けは繰り返し出てくる。ギラルドゥスは元来血統の力を高く評価しているが、ここでは裏返して強調している。いかにも無理な理屈付けであるが、あえてこのような議論をしているのは、おそらく甥の資質をけなすと、親族である自分にもその評価が跳ね返ってくるので、甥の母方の血統を持ち出

したのであろう。

上記の2つはともに中核部分第1の手紙からの引用である。ただし、これだけ激しい文章が実際に甥に送られたとは考え難い。

甥を相手としたギラルドゥスの主張を以上のように整理すると、実質的な意味をもつのはカンタベリー大司教との「約束」で彼が確保したはずのブレコン大助祭職禄が甥によって奪われ、享受できなくなった、これは不当であり、甥は自分の取り分を手渡すべきだ、ということに尽きる。他の主張は争いを仕掛けるのには役立つが、彼に何の利益ももたらさない。いわば売り言葉であり、表現を荒げるほど彼の品位が失われるような内容である。また、繰り返しになるが、大助祭職禄に対する彼の権利は「約束」の中で非公式な要素であり、正式の大助祭である甥の権利に比べると弱かったことも挙げておこう。甥にはギラルドゥスが無視している別の論拠と主張があったわけで、その内容は次節で資料に基づき検討する。

ギラルドゥスは甥以外の人に対しても非難の言葉を浴びせている。具体的には甥の指導者・補佐役であったウィリアムとセント・デイヴィズ司教ジョfreyである。「問題」が発生し拡大するにつれて、ギラルドゥスはこの2人がともに甥の側にたち、したがって、自分に敵対する存在であると確信するようになっていった。

ウィリアムに対する非難は以下の3点にまとめることができる⁽¹⁴⁾。

- ① ウィリアムは甥の教育のために雇われたにもかかわらず指導を放棄しており、甥の学習はまったく進んでいない。
- ② とかく俗事に逸脱しようとする甥に同調し、自ら悪事にふけっている。
- ③ ギラルドゥスが取得すべきサンディウ所領からの収穫物を勝手に消費した。

3点とも事実に基づく非難である可能性が高く、ギラルドゥスは甥の指導者選定を誤ったと言ってよい。

ジョfreyに対しては、司教はその立場上司教区内で発生した「ブレコン大

助祭問題」を公平な仲裁者となって解決すべきなのに、自分の仲裁要請を無視し、しかも一方的に甥の味方をしているが、これは極めて不当な態度であると非難している⁽¹⁵⁾。これも間違いなく事実であった。

では、なぜウィリアムやジョfreyがこのような行動をしたのか。彼らの意図については次節で史料に即して検討する。

Ⅵ 甥たちの主張

ギラルドゥスの強烈な非難にさらされた人びとはこれをどのように受け止め、反論したのか。本節は「ブレコン大助祭問題」を相手方から見ることにする。取り上げるのはギラルドゥスの甥ギラルドゥス、甥の指導・補佐役ウィリアム・ド・カペレ、セント・デイヴィズ司教ジョfreyである。

本節も前節と同様に、時間的順序を確定できぬまま上記3人の発言や行動を紹介する。また、本節で紹介する3人の言動はすべてギラルドゥスの目と筆を通したものである。一方の当事者が相手方を非難するためにその言動を取り上げているのであるから、前節の場合以上に強いバイアスがかかっている。したがって、本節の議論は仮説的要素をより多く含むことになる。

まず甥の言動について紹介するが、具体的な史料を引用する前に「ブレコン大助祭問題」で甥がとった基本的なスタンスないし主張を整理しておこう。本節の史料はいずれも以下の主張を部分的に表明している。

- ① 自分は正式の手続きによって任命された唯一のブレコン大助祭である。
- ② したがって、ブレコン大助祭の権限と収入は本来すべて自分に帰属すべきである。
- ③ 現在叔父ギラルドゥスが享受している大助祭関係の権限や収入は臨時的措置であって、いずれ正されるべきものである。
- ④ 正すのは自分であり、自分の意志で正すことができる。
- ⑤ その意味でギラルドゥスの非難は的外れであり、むしろ不当な要求であ

る。

以上の5点はいずれも、ギラルドゥスと大司教の「約束」の中で建て前の部分のみを取り上げて強調し、非公式な面を無視している。後者を最重要視していたギラルドゥスとは正反対の「約束」理解である。そして、第三者に対して、あるいは、形式としていずれの主張が強力かといえ、間違いなく甥のそれである。甥は形式的な正当性と現職の大助祭であることを手がかりとして、ギラルドゥスとの対立を乗り越えることができると考えていた。

「問題」発生直後にギラルドゥスの忠告を無視して司教ジョfreyと面談したのも、この優位性を確認してもらい、ギラルドゥスと真っ向から戦う準備を整えるためだった可能性が高い。これ以後彼は叔父に敵対する姿勢をあからさまに示すようになった。例えば、ブレコン、セント・デイヴィズなど各地で大助祭は自分であり、それに照らしてギラルドゥスの主張は不当であると言いふらしている。そうした事例を2つ紹介する。

(VI-1) リンカーンの助祭ロジャーから送られてきた手紙によると、「お前は
[大助祭職に付随する] これらの収入はまるでお前自身の徳行で取得した
かのように言っている」そうではないか⁽¹⁶⁾。

(VI-2) 後に聞いて分かったことだが、お前は私とともにリンカーンに滞在
していた時から、他の人々に対し「自分の収入をすべて直ちに入手したい、
あの老人[ギラルドゥス]の手元に以後収入が留まることのないようにし
たい、と公言していた」そうではないか⁽¹⁷⁾。

ともに『二人の鑑』中核部分の第1の手紙に出てくる文章である。ただし、いずれもギラルドゥスが「問題」発生後に入手した情報に言及しており、オリジナル手紙に含まれていたとは考え難い。ギラルドゥスが甥に疑いの目を向け始めると既存の情報に含まれていた意味が判明し、いろいろ新しい情報も集まったと推測されるが、そうした情報が甥に対する非難の材料として著作の中に書き込まれていったのであろう。

甥はさらに対決色を強め、単なる願望表明ではなく、明確な権利主張、さら

には、ギラルドゥスに対する非難にまで発言をエスカレートさせる。そうした状況を示唆する事例を2つ挙げる。

(Ⅵ-3) 私の聞いたところでは、あなた方の間で「私が甥に送った手紙は甥への中傷であると言われているそうだが」、それは誤解で、私の手紙は事実に即している。あなた方は私の手紙を甥に味方して読むからそうした誤解が生まれるのである⁽¹⁸⁾。

(Ⅵ-4) 「実際、[お前たち] 教師と生徒は何度も[不在の] 私を脅しつけ、[下記のように] 発言した」と聞いている。

- ① 私は大きな財産をもっていて大変富裕なのだから、イングランド王国財務府は私が取得することになっている高額の金品を渡してやる必要はない、と。
- ② 私がお前のために用意した司祭館など、私がウェールズ各地の教会にもっているすべての財産を没収する、と。
- ③ 私がお前に与えた収入のほかに、私がかつて大助祭としてどれだけの職俸を受け取っていたのか正確な額を知りたい、と⁽¹⁹⁾。

(Ⅵ-3) はギラルドゥスがヘレフォード教会の3人の参事会員に送った手紙(付属部分第2の手紙)に記されているもので、1210年末から1211年はじめに書かれたと推定されている。内容は「問題」発生後間もない時期の甥の言動であると考えてよい。甥はおそらくギラルドゥスから受け取ったオリジナル手紙を紹介しながら、ここに書かれていることは事実に反する、したがって、自分に対する中傷であると説明したのであろう。甥が「事実に反する」断定するのは、ギラルドゥスが権利主張している収入はすべて正規の大助祭、すなわち、自分に帰属すべきものと理解しているからである。ギラルドゥスと大司教の「約束」についてよく知らない人は「約束」を表面的に理解するから、甥の説明をそのまま受け入れる可能性が高いわけで、上記3人もそうした人々だったのであろう。甥は同様な主張ないし説明をあちこちでして自分の味方を増やしていった。

(VI-4) はウィリアムに関して甥の送った手紙(中核部分第2の手紙)に記されている。ここで重要なのは、甥とウィリアムが共同して動いていたとわかる点、甥が現大助祭の権限を振りかざして職俸をすべて掌握しようとしている点である。2人が相談してギラルドゥスから全収入を没収するプランを立てていた可能性が高い。なお、職俸だけが問題とされ、権限への言及がないのは、ギラルドゥスがウェールズを長期間留守にしていたこともあって、1208年の段階では彼に口出しする余地がなくなっていたためであろう。

なお、(VI-4)の①に記されている財務府からの支払いとは、カンタベリー大司教ウォルターが辞任するギラルドゥスに与えると約束した60マークのうち、未払いとなっていた40マークを指すと考えられる⁽²⁰⁾。

甥は発言をさらにエスカレートさせ、ギラルドゥスのウェールズ入国を阻止すると公言するようになった。

(VI-5)「お前は自分の承諾なしに私がウェールズへ来たり、近づいたりすることを許さない」とリンカーン在住の著述家たちの面前で述べた。「さらにお前は、自分の意思に反する行動を私がとったなら、私の身に危険が生じるであろうと述べた。」⁽²¹⁾

これは甥宛の手紙(中核部分第1の手紙)中の記述である。ここで注目したいのは、甥がギラルドゥスをウェールズから排除すると言っていることである。ブレコン大助祭である甥にそうした権限はないから、文字通り受け取るべきではないかもしれない。しかし、もしこの甥の発言が空虚な脅しではないとしたら、彼は何らかの形でギラルドゥスの行動を制約できる権力ないし実力をもつ人との連携しながら発言していることになる。

次にウィリアム・ド・カペレの言動について紹介する。

『二人の鑑』の中核部分第2の手紙がウィリアムに対する非難を目的として書かれていることから分かるように、ギラルドゥスはウィリアムに対して激しい怒りを覚えていた。前述のようにギラルドゥスはウィリアムを甥の指導・補佐役として雇ったのであり、その時点で彼はウィリアムに大きな信頼と期待

をもっていたはずである。しかし、彼の期待は完全に裏切られた。これはギラルドゥスの誤解や思い過ごしではなかった。甥が大助祭の職と職禄を与えられた最初の年からウィリアムは問題を起こしている。ギラルドゥスが挙げているウィリアムの不正行為は以下の3点である⁽²²⁾。

- ① ウィリアムはギラルドゥスが所有する穀物から12シリング分を騙し取った。
- ② ウィリアムはギラルドゥスから渡された甥の教育費を私的に流用し、しかも、教育費などは受け取っていないと偽った。
- ③ ウィリアムはギラルドゥスの所領であるサンズィウで家族とともにひと夏を過ごし、この地の収穫物を大量に消費した。その結果ギラルドゥスの収入は大きく減少した。

以上はいずれも比較的軽微な不正である。しかし、これとは別にウィリアムはギラルドゥスにとって許しがたい発言をしていた。

(VI-6) 私はウィリアムが周囲の人びとに次のように言っていると聞いた。

「なぜギラルドゥス師は〔本来〕我々のものである収入を奪い取り、それが我々に渡されるのを妨害するのか。」これ以上事を荒立てるのであれば、我々は問題を公にし、人々の前で彼に次のように促すであろう。直ちに王に詫びて、許しを得るために500マーク収めるようにしなさい、そうすれば王はギラルドゥスに何らかの地位を与えてくれるであろう、と⁽²³⁾。

このウィリアムの発言は「問題」が泥沼化した後のものであろう。前半部分でウィリアムは甥の基本的主張、すなわち、甥が正式のブレコン大助祭なのだから、大助祭の職禄はすべて甥に帰属すべきであるという考え方を繰り返しており、反ギラルドゥス派の人々に共通の理解になっていたことがうかがわれる。また、最後の文章はギラルドゥスが一度「王国の敵」とされたことを踏まえたものだろう。ただし、ウィリアムはおそらく意図的に、ギラルドゥスがカンタベリー大司教のとりなしによってこの罪名からすでに解放されていた事実をふれず、まだ汚名を着せられたままであるかのように述べている。ウィリアムが

ギラルドゥスの罪名に関する情報をどこから入手したのか明示されていないが、最も可能性が高いのは甥ないし司教ジョフレイであろう。

最後に「問題」をめぐる司教ジョフレイの言動を紹介する。

ギラルドゥスはジョフレイは欺瞞的であると非難している。以下に略述するジョフレイ宛の手紙は、多少の誇張はあっても、ほぼ事実を伝えていると思われる。

(VI-7) ① 私が甥によって職禄を奪われた後あなたに会った時に、あなたは、万一甥がこの件について訴え出るようなことがあれば、自分は判事の前で次の点について確認の証言をすると約束してくれた。「かつてニューベリー (Newbury) で甥に〔ブレコン大助祭の〕職禄が授与された際に、〔カンタベリー〕大司教や多くの司教たちの面前でブレコン大助祭区の管理とマスリー〔所領〕の職禄が私に委ねられた」と⁽²⁴⁾。

② ところが、2度目に会った時はあなたの話しぶりや考え方は変化しており、「私があなたの下で上記〔大助祭区〕を管理するという話は出されたが、自分はこれについて何も返事をしていないと述べた。」しかし、よく知られているように、沈黙は告白、同意を表すのが普通である。しかも、その後数年間あなたはこの件について発言していないのだから、承認していると解釈するのが当然である⁽²⁵⁾。

③ その後しばらくして3度目にあなたと面談し、再度大助祭職委任が話題となった時には、あなたの態度、返事ともに悪化した。あなたは、大司教の前で大助祭区の管理を私に委ねる話は出されたが、「その際、この職務ならば甥が自力で充分担当できる、[したがって、ギラルドゥスに委任する必要はない] むねの返事をした、と述べた。」司教のこの発言は私の認識とまったく違っており、事実と反すると言わざるを得ない。司教という責任ある地位の者にあるまじき変節である⁽²⁶⁾。

(VI-7) は、文面からわかるように、司教ジョフレイに宛てて書かれた手紙に記されているものである。この手紙は1211年ころに書かれたと推定されて

いる。

上記①～③が事実であるとすれば、カンタベリー大司教とギラルドゥスが「約束」を交わしたときの状況が一部分浮かび上がってくる。ひとつは、大司教の提案の中に、甥がブレコン大助祭となった後も同大助祭区の管理をギラルドゥスに任せるという一項が含まれ、この管理業務には職禄の一部であったマズリー所領からの収入が付随していたことになる。この点は第4節で紹介したギラルドゥスの主張と合致する。もうひとつは、新しくセント・デイヴィズ司教に就任したジョフレイがこの場に立ち会っていて、おそらく「約束」について何の発言もしなかったと推定されることである。

一般的に言えば、この時の司教の沈黙は大司教の提案に反対しないという意思表示と理解するのが自然であり、ギラルドゥスもそう理解したのである。したがって、(Ⅵ-7)に見られる見解の相違について言えば、ギラルドゥスが真実を述べていることはまず間違いない。司教は時とともに、すなわち、ギラルドゥスの状況が悪化するにつれて、発言を自分の利益になるよう変えていった。本来司教は、その管理下にある大助祭職にかかわる争いが発生した場合、これを中立的な立場で裁定する責任を負っている。しかし、司教がこのように変節しているのを見ると、彼は基本的に反ギラルドゥスの立場をとり、当初はこれを隠していたと判断するのが自然であろう。

甥、ウィリアム、ジョフレイがギラルドゥスと対立する中でそれぞれ示している言動は以上ではほぼ尽きている。そこで、これを踏まえて、以下では3人の言動から彼らがどのような関係をつくり、保っていたのか推定してみる。具体的にいえば、① 3人は何か共通のプランに従ってギラルドゥスに対峙したのか、② もしそうであれば、彼らのプランはどのようなものであったのかという問題である。いずれも「ブレコン大助祭問題」の性格や構造を理解するために不可欠な点である。

まず、「問題」発生以前のギラルドゥスにとって3人との関係は必ずしも敵対的なものではなく、少なくとも表面的には良好なものだったことを確認して

おこう。

ギラルドゥスは大助祭を譲ることによって甥に恩恵を与えたと考えていた。後任者として甥の名を上げたのはカンタベリー大司教であったかもしれないが、その場合でも、ギラルドゥスが賛同したことは間違いない。ウィリアム・ド・カペラについて言えば、彼を甥の指導・補佐役に選び、その費用を負担したのはギラルドゥスであった。

セント・デイヴィズ司教ジョフレイとの関係はより複雑である。2人は先任司教ピーター（Peter）死去後の司教候補選出に際してライヴァルの関係にあった。ジョフレイは大司教の意を受けた候補であり、結果としてギラルドゥスの司教就任を妨げたから⁽²⁷⁾、決着がついた後も敵対的感情が残っていた可能性がある。しかし、ギラルドゥスの記述を信ずるならば、彼は大司教からジョフレイに聖別を与えると告げられた時に積極的に賛成し、さらに、ジョフレイに対してセント・デイヴィズ司教区の管理についていろいろ助言を与えている⁽²⁸⁾。助言の中には、大司教から同教会の大司教座権を今後要求しないという誓約を求められるだろうが、断るようという忠告も含まれていて、これは無視されたが、少なくとも表面的にはジョフレイと良好な関係をつくろうとしている。自分がいわば影のブレコン大助祭になる目算をもっており、司教の配下に甥を送り込んだのであるから、司教との良好な関係は現実的な意味をもっていた。

彼がこれら3人との関係にあまり疑いをもたず安心していたことは、数年間ウェールズを離れ、彼らが自分の期待通りに行動しているかどうかチェックしなかった事実から明らかである。

これに対して、甥たちはそれぞれ別の理由で、「ブレコン大助祭問題」が顕在化する前から、ギラルドゥスの影響力を削ぎたいと考えていた。

甥にとって重要だったのは、ギラルドゥスと大司教の「約束」に付随している裏の条件を削除し、名実ともに自立したブレコン大助祭になることであった。地位、職務にふさわしい収入源を独占できるのも大きなメリットであった。

ウィリアムはギラルドゥスに雇われて甥の指導・補佐役となったのにもかかわらず、ギラルドゥスの判断に従えばこの任務を放棄し、加えて、ギラルドゥスの収入の一部を私的に流用していたので、告訴されても仕方のない状況にあった。この追求を逃れるためには、一方で大助祭としての権限をもつ甥と結託し、他方でギラルドゥスの発言力、影響力を削ぐのが実効性の高い方法であった。

ジョフレイにとっては、就任に際して自分と競い、しかも一時はセント・デイヴィズ教会の全面的支持を集めたギラルドゥスが大きな影響力をもち続けると、自由に司教区を支配できない。実際ギラルドゥスは教会、司教区の実情を長年の経験から熟知しており、ローマ巡礼からもどって腰を落ち着ければ、甥への助言を通じて司教の行動、判断に異論を唱えることも予想された。また、司教は(VI-7)が示しているように大司教がギラルドゥスとの「約束」を結んだ場にいたから、大司教の狙い、すなわち、セント・デイヴィズ教会の大司教座権など大司教にとって迷惑な主張をギラルドゥスがしないよう阻止すべき立場にいることをよく承知していた。背後にはカンタベリー大司教がいたのである。

このように直接的利害は違っていても、3人がいわば共同戦線を作ってギラルドゥスと対決する可能性は早くから存在していたのであって、「ブレコン大助祭問題」はそれが顕在化した事件であった。表面上はギラルドゥスと甥という肉親間の争いのように見えても、実際には南ウェールズ聖界、さらには、イングランド王国のウェールズ政策にまで大きな影響を及ぼす問題だったのである。この意味で「ブレコン大助祭問題」は「セント・デイヴィズ問題」を継承している。ただ、最終的にギラルドゥスの主張が抹殺されたため、また、ジョフレイたちがこの「問題」の源、すなわち、カンタベリー大司教とギラルドゥスが交わした「約束」に根ざしていることを表に出さないまま処理しようとしたため、問題が矮小化されて伝えられたのである。

このように推定した上でこれまでに紹介した史料を見直すと、3人がギラル

ドゥスの排除という共通の目的をもって行動していたことが分かる。

- ①「問題」発生時に甥が単独で司教と面談し、直後から反ギラルドゥスの主張を公然と始めたこと。おそらくギラルドゥスとの対決について相談ないし確認したのであろう。(IV-1)を参照。
- ② 甥がギラルドゥスのウェールズ入国を阻止すると公言したこと。彼の発言は入国を実際に阻止できる地位の者、例えば司教との連携を踏まえてなされた可能性が高い。(VI-5)を参照。
- ③ ウィリアムがギラルドゥスに対して大金を払ってイングランド王の許しを求めるよう勧める発言をしたこと。「セント・デヴィズ問題」にかかわってギラルドゥスが着せられた罪名「王国の敵」はすでに解除されていたが、こうした脅しが出てきたのは彼が甥や司教と情報や判断を共有していたからである。(VI-6)を参照。
- ④ カンタベリー大司教とギラルドゥスが「約束」を交わした場にいた司教ジョfreyが、その場で自分がとった行動について説明を変え、順次反ギラルドゥスの姿勢を明らかにしていったこと。これは、ギラルドゥスの立場が弱まる中で、甥たちの行動に合わせた発言であった可能性が高い。

もうひとつ新しい史料を引用しておこう。『二人の鑑』の中核部分第1の手紙に記されているものである。

(VI-8)「私の甥〔であるお前〕は、私の破滅をたくらんでいるのだ。同様なことはかつてセント・ドグマイル修道院長がカンタベリー大司教の前で立てた誓いについても言える。修道院長は、大司教がその権力によって私をイングランドから排除するのなら自分は私をウェールズから追放して、私に決定的な打撃を加える、と豪語した。実際両者の目的は「私をウェールズ国境から遠くの土地へ追い出すことにあったのだ。」⁽²⁹⁾

セント・ドグマイル (St. Dogmael) 修道院長はカンタベリー大司教ウォルターの腹心で、ギラルドゥスの対抗馬としてセント・デヴィズ司教候補に挙げられた人物であり、ジョfreyの司教就任後もギラルドゥスに対して敵対意

識をもっていたのだろうが、それだけではなく、彼は大司教の意を汲んで、また、大司教の権威を借りてギラルドゥスをウェールズから追放すると放言していた。ギラルドゥスは1208年に甥たちの「約束」に反する行為を知った時に、修道院長の暴言が真意に基づいていること、すなわち、敵方が自分をウェールズ聖界から完全に排除しようと計画していることをはっきり理解したのであらう。

以上のように推測を進めてみると、ギラルドゥスの包囲網は1208年の「問題」発生以前から密かに形成されていたと考えてよい。ただし、「問題」の口火を切ったのは、先に非難の声をあげたギラルドゥスであった。甥はギラルドゥスの非難を自分の姿勢を明確にするきっかけとして利用し、公然と反ギラルドゥスの動きを始めた。『二人の鑑』を表面的に読むと、ギラルドゥスが「問題」を作り出したように見えるが、実際はむしろ逆で、甥やジョフレイが仕掛けた火薬にギラルドゥスが点火した、という関係であった。

VII 結果

本節は「ブレコン大助祭問題」がどのような結末をむかえ、ギラルドゥスはこれをどのように受け止めたかについて、推測を含めて検討する。

「問題」そのものの結末は簡明で、ギラルドゥスの完敗である。彼の主張は彼をよく知る一部の聖職者たちに受け入れられただけで、それも共感あるいは同情の範囲にとどまった。『二人の鑑』を見るかぎり、彼を実際に支援する人は出てこなかった。他の著述から判断して、彼は争いの中で自分を支援してくれる人がいたならば、まず間違いなく言及し、賞賛しているはずである。

ギラルドゥスは孤立状態に追い詰められ、結局カンタベリー大司教との「約束」によって保持していたブレコン大助祭職禄をすべて失った。甥は大助祭の職務や権限を「問題」発生以前から掌握しており、ギラルドゥスの大助祭区来訪でさえ妨害する姿勢を見せていたから、形式上ギラルドゥスが保持していた

指導権を無視するのは容易であった。加えて、甥はこうした姿勢や行動についてセント・デイヴィズ司教ジョフレイの承認を得ていた。司教の指示によって行動していた可能性もある。その司教は、自分を聖別してくれたカンタベリー大司教ウォルターの意向を踏まえて、かねてよりギラルドゥスの排除を計画していた。甥は権力をもつ上司の支持を得てギラルドゥスから職禄を奪取したのである。

では、ギラルドゥスが敗北を覚悟したのはいつころだったのか。『二人の鑑』の記述は最後まで戦闘性を失っていないが、これはジェスチュアである。実際には甥との戦いを始めて間もなく彼はあきらめの心境に達していた可能性が高い。表向きとは逆に、あきらめの心境を反映していると思われる記述が出てくるからである。3つ事例を挙げよう。

(Ⅶ-1) 今後またお前が悪行へ走りたくなることもあるだろうが、そうした場合には、「自分の品行、マナー、習慣が[正しいものなのか] 調べることができ鑑として、この手紙を手元に置き、ひとりで読むようにしなさい。」⁽³⁰⁾

(Ⅶ-2) 私は年々の収入その他を失ったが、それ以来3, 4年経過し、その間損失に耐えてきた。しかし、「所有物の損失はこの間の時間の損失に比べればそれほど重要ではない。所有物は戻ってくるが、時間は過ぎ去って取り戻すことができないからである。」⁽³¹⁾

(Ⅶ-3) 私は甥と争ってきたが、「その目的は不名誉な[疑い]を晴らすこと、および、奪われた自分の財産を部分的にでも名誉ある方法で取り戻すことにあった。」これができていれば、私も甥も名誉を失うことはなかったであろう⁽³²⁾。

(Ⅶ-1) はウィリアムに対する非難を書き連ねた甥あての手紙(中核部分第2手紙)の末尾に記されている文章である。『二人の鑑』という書名を選んだ理由を説明しているのであるが、それ以上に興味深いのは、彼がこれまでの戦闘的な記述をやめて将来甥にとって自著が参考になるはずだと述べていること

である。戦闘停止を表明している文章であり、おそらく中核部分がほぼ完成した遅い時点に書き込まれたのであろう。

(Ⅶ-2) と (Ⅶ-3) はともに司教ジョフレイに送られた手紙(付属部分第6手紙)の文章で、1211年に書かれたと推定されている。この推定は(Ⅶ-2)の記述、すなわち、ギラルドゥスが職禄を失ってから3、4年たつという記述に基づいている。ギラルドゥスが甥たちの不正行為に気づいたのは1208年であったから、計算は合っている。

(Ⅶ-2)、(Ⅶ-3)でギラルドゥスが敗北を自覚し、あきらめの心境に達していたことは明らかであろう。時間の損失や名誉を問題にしているのは彼らしい負け惜しみである。

では、1211年までにギラルドゥスが敗北を認めていたとして、彼はその後どのような生活を送ったのか。残されている僅かな史料から推測してみよう。

まず本稿と直接関係する深い活動として、「ブレコン大助祭問題」にかかわる手紙を2通書いている⁽³³⁾。1通はおそらく1213年にサンソニー修道院長宛に書いた手紙(付属部分第7手紙)で、「問題」の経過を簡単に説明しながら、自分は不当な扱いを受けたと訴えている。もう1通は1213年末か翌年初めに司教ジョフレイに送られた手紙(付属部分第8手紙)で、歴代の司教と比較しながらジョフレイの司教区管理を非難している。教会財産を勝手に手放すなど、司教としてあるまじき行為が多いというのである。後者の手紙は直接「問題」に言及していないが、彼があえて『二人の鑑』に収録しているのであるから、少なくとも彼の判断では関連性が明確だったわけで、おそらく「問題」が展開する中でジョフレイが見せた態度を非難する材料として取り上げたのであろう。

「ブレコン大助祭問題」外の分野に目を転じると、1211年以降もギラルドゥスは活発な文筆活動を続けている。この点は本稿末尾の年表を見れば明らかである。1213年以降1218年まで彼は毎年新しい著作を手がけるか、すでに発表された著作の改定版を作り上げている。70歳を超えた人としては驚くべき量の著述である。ただし、その内容は既存の著作を利用した自己弁護や自己讃美

が多く、新しいテーマを立てての記述はほとんどない⁽³⁴⁾。伝えられている限りで彼の最後の文筆活動は1220年に書かれた2通の手紙である⁽³⁵⁾。

これだけ多くの著作を物したのであればギラルドゥスは充実した生活を送っていたと思われるが、実際にはどうであったか。精神面と物質面に分けて検討しよう。

残されている史料から判断すると、ギラルドゥスの内心は決して平穏ではなかったと考えざるを得ない。上述のように彼は1211年以後も「ブレコン大助祭問題」にこだわっていたし、この時点では「問題」が「セント・デイヴィズ問題」とつながっていることをよく認識していた。そして、この2つの大きな事件で苦渋は飲まされたが、それは自分の責任ではなく、不当な要求を力で押し付けてきた相手方が悪いと彼は信じていた。本来ならばセント・デイヴィズ司教としてウェールズ聖界をリードしているはずの自分がその道を断たれ、文筆活動に限られた生活を強いられているのは不当であるという気持ちは抑えがたく、何度も心の中に浮かび上がってきたであろう。晩年の著作が自己弁護や自己讃美に満ちているのも、こうした気持ちをどこかで発散する必要があったからではなかろうか。ギラルドゥスは強い不満をもって生活していたと私は推測する。

物質面ではまず安定した生活を送っていたと思われる。貧困に苦しんだ形跡は残されていないし、ともかくも文筆活動に専念できたのは生計が維持されていたからである。聖職者、特に老境に達した者は教会や修道院の支援を得るのが普通であり、ギラルドゥスも個人的収入のみで生計を立てていたのではない。内容は不明だが、ブレコン大助祭の職録が完全に失われても生活に困らない程度の収入は確保されていたと考えてよいであろう。それにしても1208年以降彼の所得が大幅に減少したことは間違いない。

この時期の聖界における彼の動きはほとんど伝えられていないが、これは彼が名実ともに大助祭の職を退いた後であるから当然であろう。唯一注目に値するのは、1215年に司教ジョフレイが死去して司教候補選出作業が始まった時

に、セント・デイヴィズ教会の内部にギラルドゥスを推す動きがあったことである⁽³⁶⁾。結局推挙されずに終わったが、この時点でも70歳を超える彼を支持する人々が教会内にいたことは重要である。彼の南ウェールズ聖界における影響力は簡単に排除できなかったことがわかる。

ギラルドゥスは1222年か1223年に死去した。1145年生まれだとすると77歳か78歳になっており、これは当時としてはまれに見る長寿であった。死去した場所は確認できないが、最後の消息はリンカーン在住を示唆しており、おそらくここで生を終えたと推定されている⁽³⁷⁾。

VIII おわりにー「ブレコン大助祭問題」

「ブレコン大助祭問題」とはなんだったのか。この点について前節までの検討結果を整理して本稿を閉じることにする。

まず「問題」の直接関係者を確認しておこう。私は、前ブレコン大助祭であったギラルドゥスが一方の当事者、もう一方の当事者は、彼の甥で現ブレコン大助祭ギラルドゥス、その指導・補佐役ウィリアム・ド・カペラ、セント・デイヴィズ司教ジョフレイの3人であったと考えている。これまでの研究者はしばしば「問題」を同じ名をもつ叔父と甥との争いだったと紹介しているが、これは不正確である。

当事者が拡大されると、争いの対象にも違いが出てくる。これまでの研究者は例外なく「問題」はブレコン大助祭職禄をめぐる争いであったと述べている。より正確に表現するならば、ギラルドゥスがカンタベリー大司教ウォルターとの「約束」で確保した分の大助祭職禄をめぐる争いである。確かに「問題」に関する唯一の史料『二人の鑑』では職禄が最大の争点となっている。

しかし、これはギラルドゥスから見た争点、目的であり、甥たちの側ではより複雑だった。まず甥にとっては、ギラルドゥスと同様に職禄の確保は重要であった。「約束」によって叔父に割り当てられた大助祭の職禄をすべて取得す

れば、それだけ裕福な生活を送ることができ、大助祭の職を名実ともに確保することにもなる。しかし、司教まで含めた3人のグループにとって何が目的であったかと言えば、それはギラルドゥスをウェールズ聖界から排除し、その発言力、影響力を封殺することだった。3人は連携してギラルドゥス包囲網を作り、彼を追い詰めていった。この点で「ブレコン大助祭問題」には「セント・デイヴィズ問題」の結末を補完する役割をもっていた。以上のように当事者によって中心的争点ないし目的が違うことが「ブレコン大助祭問題」最大の特徴である。

目的が違えば戦略にも差が出てくる。ギラルドゥスは職禄の取り分を確保するために、その唯一の論拠となる大司教との「約束」、それも裏側の取り決めを重視し、強調した。甥の側は反対にもっぱら正規の大助祭は自分であってギラルドゥスではないことを強調し、大助祭の職禄はすべて大助祭に帰属するという表側の論理を振りかざした。ギラルドゥスを一介の聖職者にしてしまえば、その一石で職禄奪取と影響力の封殺という二鳥が期待できた。彼らの作戦は成功し、ギラルドゥスは完敗した。実際、「問題」決着後の彼は聖職者として目立った活動をしていない。

では、上記のような争点のずれはなぜ生まれたのか、また、いつ生まれたのか。この点を検討するためには、1203年に結ばれた「約束」にまでさかのぼる必要がある。

すでに紹介したように、「約束」は矛盾含みの2面性をもっていた。また、「約束」はギラルドゥスと甥とを対等に扱っているわけではなく、運用しだいでギラルドゥスを追い詰めることのできる仕掛けを内蔵していた。新しい大助祭が自分の正規の権利と職禄を主張すれば、正式の裁判など表舞台でギラルドゥスはこれに対抗できなかったのである。実際、「問題」発生後の甥はこのギラルドゥスの弱点をつき、全職禄の独占を当然のこととして要求した。また、「約束」をよく知らない周囲の人びとは甥の主張が正当であると判断した。このように「約束」の中にギラルドゥス排除につながる、少なくともそのように

利用できる要素が組み込まれていたのである。

大司教ウォルターがここまで見通して「約束」を提案したのかどうか確認できない。しかし、大司教がギラルドゥスに温情的な姿勢を示し、かなりの妥協をしているように見せかけながら、近い将来彼をウェールズ聖界から排除する目論見を立てていた可能性は高いと私は考える⁽³⁸⁾。

同様な仕掛けはギラルドゥスの後継者選択にも見られる。ギラルドゥスが早くから甥を取り立ててしかなるべき地位につけようと考えていたことは間違いのない。甥の父親フィリップから懇願されていたからである。カンタベリー大司教から甥を後任にという提案があった時に彼は驚き、最初是否定的な返事をしたと言っているが、これは必ずしも彼の本心ではなかっただろう。逆に彼はチャンス到来と喜んだのではないかと私は推測する。それは未熟な甥が後継者になれば、経験豊かな肉親である自分が甥を支援するのは自然のこととなり、甥への助言を通してブレコン大助祭区はむろん、セント・デイヴィズ教会にも自分の影響力を発揮できる。さらに、大助祭区の管理を指導する中でその職禄の一部を辞任後も確保できる。ギラルドゥスがこのように期待しても不思議ではない人選である。ただし、彼の期待が実現するためには、甥が彼の指導を喜んで受け入れる必要があった。

しかし、これまで紹介してきたように、甥はまったく逆の行動をとった。少なくとも「問題」発生後の甥は一貫して反ギラルドゥスの姿勢を保っており、1207年以前でもギラルドゥスの不在を利用して叔父の期待に反する行動をした可能性が高い。そして、重要なのはギラルドゥスへの反抗は個人的な不服従ではなく、司教ジョフレイと連携した計画的な行動だったことである。

この連携は秘密だったから、甥が司教側に立ったのはいつからなのか明確な記録はない。しかし、上記で推定した大司教の目論見が事実であったとすると、大司教は自ら聖別したジョフレイを通じて早くから甥に働きかけ、味方に引き入れていた可能性がある。甥自身にとってもギラルドゥス排除のメリットはよくわかっていたはずである。いつ来るかわからない叔父の死を待ってこの先何

年も窮屈な生活を送るよりも、大司教、司教を連携しながらギラルドゥス排除につながる行動を積み重ねるのが得策だと判断したのであろう。しかも、そうした行動は大助祭の職をまっとうすることでもあった。その後の経過を見ると大司教にとって甥の選択は成功だった。ギラルドゥスを安心させる方策が同時に彼を排除する道につながったからである。

以上のような「ブレコン大助祭問題」理解に大きな誤りがないとして、ひとつ大きな疑問が浮かんでくる。それは、ギラルドゥスがなぜ自分を排除しようとする大司教の思惑、さらには、甥たちの具体的なたくらみに気づかなかったのかという点である。

まず、ギラルドゥスはいつ甥たちの真意を察知したのであろうか。彼自身が明記しているわけではないが、私は1208年、「問題」が発生した時であると推測する。具体的には司教ジョフレイがブレコン大助祭職禄の私的流用について釈明する場に甥が独断ででかけた後、その報告をギラルドゥスにしないままブレコン教会へ行って、「約束」で認められているギラルドゥスの職禄取得を批判し始めた時である。ギラルドゥスからすれば「約束」を無視した不当な主張であって、なぜ甥がこのような行動をするのか不審に思ったはずである。不審に思えばこれまでとは違った目で甥の行動を見守るようになり、何かたくらみが隠されていると気づくのは容易である。さらにウィリアムやジョフレイの言動を考え合わせてみて、自分に対して密かな包囲網が張られているとわかったのであろう。

では、なぜ1208年までギラルドゥスは甥たちのたくらみに気づかなかったのだろうか。前述のように、彼は1203年から1207年までアイルランドやローマに旅をしており、しかも、帰国して居を定めたのはリンカーンであった。この間彼はウェールズ、特にセント・デイヴィズ司教区でどのような動きがあるのか、情報をつかみにくい状況にあった。甥たちは秘密裏に計画を練っており、しかも、計画実現に必要な行動は簡単だった。ギラルドゥスに職禄の取り分を渡さなければよいのである。遠隔地にいる者が相手方の不履行を発見するのは

難しい。

ギラルドゥスが甥たちの行動と意図をすばやく正確に理解するためには、自ら南ウェールズにとどまり日々甥たちの職務遂行を見守る必要があった。大司教との「約束」はあっても、彼の権利は内々の、したがって、弱いものにすぎなかったからである。ところが、彼はこの肝心の時にブレコン大助祭区の管理を甥とウィリアムに完全に任せ、自分は情報の届きにくい土地に4年間も滞在していた。甥たちが自由にたくらみを進める条件を整えてやったと言ってもよい。私は、「ブレコン大助祭問題」で彼が完敗した最大の理由はこの4年間のいわば油断にあると考える。彼は自分の置かれていた状況を見誤っていたのである。

同様な見誤りは、大司教ウォルターが示した温情的処遇についても、また、司教ジョフレイがとらざるを得なかった基本的立場についても見られる。このように判断が甘くなったのはなぜか。彼生来の性格なのか、「セント・デヴィーズ問題」をめぐる戦いに疲れたためか、それとも、1203年以降彼に何か史料に記されていない強制力がかかっていたのか、疑問はさらに広がる。

参考文献

I 史料

(A) ギラルドゥスの著作と訳本

- [1] Giraldus Cambrensis: Descriptio Kambriae (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1866.) (『ウェールズ案内』)
- [2] Giraldus Cambrensis: Descriptio Kambriae (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1866.) (『ウェールズ旅行記』)
- [3] Giraldus Cambrensis: Topographia Hibernica (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambernsis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867.) (『アイルランド地誌』)
- [4] Giraldus Cambrensis: Expugnatio Hibernica (in Dimock, James E. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867.) (『アイルランド征服』)
- [5] Giraldus Cambrensis: De Rebus a se Gestis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861.) (『自叙伝』)

- [6] Giraldus Cambrensis: Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi (in Brewer, J.S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis* vol. 3, H. M. S. O., 1863.) (『セント・デイヴィズ教会大司教聖デイヴィッド伝』)
- [7] Giraldus Cambrensis: De Vita Galfredi Archiepiscopi Eboracensis (in Brewer, J.S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873.) (『ヨーク大司教ジョフレイ伝』)
- [8] Giraldus Cambrensis: De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae, Dialogus (in Brewer, J.S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 3, H. M. S. O., 1863) (『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』)
- [9] Giraldus Cambrensis, (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed., trans.)): *Expugnatio Hibernica, The Conquest of Ireland*, Royal Irish Academy, 1978. (『アイルランド征服』)
- [10] Giraldus Cambrensis (Davies, W.S. (ed.)): De Invectionibus/The Book of Invectives of Giraldus Cambrensis, *Y Cymmrodor*, vol. xxx, 1920. (『論駁』)
- [11] Giraldus Cambrensis (Lefevre, Y. & Huygens, R.B.C. (eds., trans.)): *Speculum Duorum, or a Mirror of Two Men*, University of Wales Press, 1974. (『二人の鑑』)
- [12] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863.) (『ウェールズ案内』)
- [13] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978. (『ウェールズ案内』)
- [14] Giraldus Cambrensis: The Itinerary through Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863.) (『ウェールズ旅行記』)
- [15] Giraldus Cambrensis: The Journey through Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978. (『ウェールズ旅行記』)
- [16] Giraldus Cambrensis: Topography on Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド地誌』)
- [17] Gerald of Wales, (O'Meara, John (trans.)): *The History and Topography of Ireland*, Penguin Books, 1951. (『アイルランド地誌』)
- [18] ギラルドゥス・カンブレンシス (有光秀行訳): 『アイルランド地誌』, 青土社, 1996年。
- [19] Giraldus Cambrensis: The Vaticinal History of the Conquest of Ireland (in

Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド征服』)

- [20] Giraldus Cambrensis (Rutherford, Anne (ed., trans.)): *"I, Giraldus", The Autobiography of Giraldus Cambrensis (1145~1223)*, Rhwymbooks, 2002. (『自叙伝』)

Ⅱ 研究文献

- [21] Babcock, Robert Sherburne: *Rule and Society in South-West Wales, 1079 ~1197*, 1992, Doctorial Dissertation submitted to University of California, Santa Barbara.
- [22] Bartlett, Robert: *Gerald of Wales, 1146~1223*, Clarendon Press, 1982.
- [23] Bartlett, Robert: *Heartland and Border, the Mental and Physical Geography of Medieval Europe*. (in [54])
- [24] Brooke, Christopher N. L. : *The Archbishops of St. David's, Llandaff and Caerleon on Usk*. (in [25]).
- [25] Brooke, Christopher N. L. : *The Church and the Welsh Border in the Central Middle Ages*, The Boydell Press, 1986.
- [26] Charles-Edwards, T. M. : *Seven Bishop-Houses of Dyfed*, *Bulletin of the Board of Celtic Studies*, vol. 24-2, 1971.
- [27] Clarke, Henry William: *A History of the Church of Wales*, Swan Sonnenschein, 1896.
- [28] Davies, J. Conway: *Giraldus Cambernsis and Powys*, *Montgomeryshire Collections*, vol. 49, 1945/46.
- [29] Davies, J. Reuben: *Aspects of Church Reform in Wales, c. 1093~c. 1223*, *Anglo-Norman Studies*, vol. 30, 2007.
- [30] Davies, R. R. : *Conquest, Coexistence, and Change. Wales 1063~1415*, University of Wales Press, 1987.
- [31] De Hirsch-Davies, John Edwin: *A Popular History of the Church in Wales, from the Beginning to the Present Day*, Isaac Pitman, 1912.
- [32] Edwards, Alfred George: *Landmarks in the History of the Welsh Church*, John Murray, 1912.
- [33] Edward, Fiona & Russell, Paul (eds.): *Tome, Studies in Medieval Celtic History and Law, in honour of Thomas Charles-Edwards*, Boydell Press, 2011.
- [34] Evans, H. Wyn: *The Bishops of St. David's from Bernard to Bec*. (in [69]).

- [35] Evans, J. Wyn & Wooding, Jonathan M. (eds.): *St. David of Wales, Cult, Church and Nation*, Boydell Press, 2007.
- [36] Evans, J. Wyn: Transition and Survival, St. David and St. David's Cathedral. (in [35]).
- [37] Holmes, Urban T.: The Kambriae Descriptio of Gerald the Welshman, *Medievalia et Humanistica*, new series, vol. I, 1970.
- [38] Hughes, Herbert: Giraldus de Barri: An Early Ambassador for Wales, *Brycheiolog*, vol. XXXVIII, 2006.
- [39] Hurlock, Kathryn: *Wales and the Crusades, c 1095~1291*, University of Wales Press, 2011.
- [40] Isaac, G. R.: The Cult of St. David. (in [35]).
- [41] Jones, Thomas: *Gerallt Gymro, Gerald The Welshman*, University of Wales Press, 1947.
- [42] Jones, Thomas: Gerald the Welshman's "Itinerary through Wales" and "Description of Wales", *The National Library of Wales Journal*, vol. VI, no. 3, 1950.
- [43] Kightly, Charles: A Mirror of Medieval Wales, Gerald of Wales and his Journey of 1188. Cadw, 1988. (和訳書 [77])
- [44] King, David & Kenyon, John: The Castles of Pembrokeshire. (in [69]).
- [45] Lieberman, Max: *The March of Wales, 1067~1300, A Borderland of Medieval Britain*, University of Wales Press, 2008.
- [46] Lloyd, John Edward: *A History of Wales, from the Earliest Times to the Edwardian Conquest*, 2 vols., Longmans, Green, 1912.
- [47] Marsden, Richard: Gerald of Wales and Competing Interpretations of the Welsh Middle Ages, c. 1860~1910. *The Welsh History Review*, vol. 25, no. 3, 2011.
- [48] Miles, John: *Gerald of Wales, Giraldus Cambrensis*, Gomer Press, 1974.
- [49] Newell, E. J.: *A History of the Welsh Church to the Dissolution of the Monasteries*, Elliot Stock, 1895.
- [50] Owen, Henry: *Gerald the Welshman*, David Nutt, 1904.
- [51] Owen, W. Jones & Walker, David (eds.): *Links with the Past, Swansea and Brecon Historical Essays*, Christopher Davies, 1974.
- [52] Pitts, David: *The Early Medieval Church in Wales*, History Press, 2009.
- [53] Pryce, Huw: In Search of Medieval Society: Deheubarth in the Writings of Gerald of Wales, *The Welsh History Review*, vol. 13, no. 3, 1987.
- [54] Pryce, H. & Watts, J. (eds.): *Power and Identity in the Middle Ages, Essays in Memory of Rees Davies*, Oxford University Press, 2007.

- [55] Pryce, Huw: Gerald of Wales and the Descriptio Kambriae. (in [33])
- [56] Rees, J. F. : *Studies in Welsh History, Collected Papers, Lectures, and Reviews*, University of Wales Press, 1965.
- [57] Rhys, John & Brynmor-Jones, David: *The Welsh People, Chapters on their Origin, History and Laws, Language, Literature and Characteristics*, Haskell House Publishers, 1906.
- [58] Richter, Michael: *Giraldus Cambrensis, the Growth of the Welsh Nation*, Aberystwyth, 1972.
- [59] Richter, Michael: Gerald of Wales: A Reassessment on the 750th Anniversary of his Death, *Traditio*, vol. 29, 1973.
- [60] Sharpe, Richard: What Text is Rhigyfarch's Life of St. David? (in [35])
- [61] Sharpe, Richard & Davies, John Reuben: Rhigyfarch's Life of St. David (in [35])
- [62] Stephens, Meic (ed.): *The New Companion to the Literature of Wales*, University of Wales Press, 1988.
- [63] Turvey, Roger: *The Lord Rhys, Prince of Deheubarth*, Gomer, 1997.
- [64] Turvey, Roger: *The Welsh Princes, 1063~1283*, Longman, 2002.
- [65] Wada, Yoko: Gerald on Gerald, Self-Presentation by Giraldus Cambrensis, *Anglo-Norman Studies*, vol. 20, 1998.
- [66] Walker, David: Gerald of Wales, Archdeacon of Brecon. (in [51])
- [67] Walker, David (ed.): *A History of the Church in Wales*, Church in Wales Publications, 1976. (和訳書 [76])
- [68] Walker, David: Gerald of Wales, *Brycheiniog*, vol. XVIII, 1978-79.
- [69] Walker, R. F. (ed.): *Pembrokeshire County History*, vol. II, Pembrokeshire Historical Society, 2002.
- [70] Walker, R. F. : The Earls of Pembrokeshire, 1138~1379. (in [69]).
- [71] Williams, A. H. : *An Intoroduction to the History of Wales*, 2 vols., University of Wales Press, 1941 & 1948.
- [72] Williams, C. H. : Giraldus Cambrensis and Wales, *Journal of the Historical society of the Church in Wales*, no. 2, 1947.
- [73] Williams, Glanmor: The Tradition of St. David's in Wales. (in [51])
- [74] Wooding, Jonathan M. : The Figure of David. (in [51])
- [75] 有光秀行『中世ブリテン諸島史ーネイション意識の諸相』, 刀水書房, 2013 年。
- [76] D. ウォーカー (編) (木下智雄 (訳)): 『ウェールズ教会史』, 教文館, 2009 年。
- [77] C. カイトリー (和田葉子 (訳)): 『中世ウェールズをゆくージェラルド・オヴ・ウェールズ 1188 年の旅』, 関西大学出版部, 1999 年。

- [78] 永井一郎「ノルマン侵入後のウェールズー独立をかけた戦い」(青山吉信 編著『世界歴史大系 イギリス史 I 先史～中世』, 山川出版社, 1991 年)。
- [79] 永井一郎「『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレシスの二元性」, 『国学院経済学』第 57 巻 3・4 号, 2009 年。
- [80] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスと 12 世紀南ウェールズの政治世界 (I), (II)」『国学院経済学』第 59 巻 1 号, 2010 年, 第 59 巻 2 号, 2011 年。
- [81] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスの自己認識とウェールズ評価 (I), (II)」『国学院経済学』第 59 巻 3・4 号, 2011 年, 第 60 巻 2 号, 2012 年。
- [82] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスのキャリア・デザイン (I), (II)」『国学院経済学』第 62 巻 2 号, 2014 年, 3・4 号, 2014 年。
- [83] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスとセント・デイヴィズ問題 (I), (II), (III)」『国学院経済学』第 63 巻 1 号, 2014 年, 第 63 巻 3・4 号, 2015 年, 第 64 巻 2 号, 2015 年。

註 (第 5～第 8 節)

第 5 節

- (1) リヒターによれば, ギラルドゥスは 1206 年のローマ巡礼の際に教皇と面談し, 自分がこれまで享受してきた聖職禄をすべて返上すると申し出たという。これが事実であり, 教皇が受け入れたのであれば, 1208 年に「プレコン大助祭問題」が発生する以前に彼は甥と聖職禄をめぐる争い根拠を失っていたわけで, 「問題」そのものが成立しなくなる。この申し出について彼は尊敬していたとマス・ベケットならなかったと記しているので, おそらく自分にとって大切なのは財産や名誉ではなく, 神の信仰であると教皇に強調して見せたのであって, 収入源を放棄したのではない。Giraldus (Richter) [11], pp. xxxii~xxxiii.
- (2) Giraldus [11], pp. 246~247.
quandam prebende nostre de Martru porcionem diucius a nobis iuste possessam cum decimis autumpni illius subito sequestravit.
- (3) Giraldus [11], pp. 244~245.
de novo ceperunt et nos domibus nostris de Landu, quas fecimus et terris etiam laicis nec non et ecclesia cum archidiaconatus administratione tota.
- (4) Giraldus [11], pp. 218~219.
de archidiaconatu et prebenda et ecclesia de quinquaginta marcarum aut plurium annuatim dampna senserunt.
 拙訳は英訳に従って, 引用文中の *ecclesia* をテンビー (Tenby) 教会と理解している。また, 英訳は金額 *quinquaginta marcarum* を 40 マークとしているが, こ

れは誤りである。

- (5) なお、ギラルドゥスがもっていたテンビー教会からの収入は、かつてギラルドゥスがこの教会のために尽くしたお礼として年々受け取っていたものである可能性が高い。彼は1174年から76年にかけてカンタベリー大司教の代理人として熱心に南ウェールズの教会改革を進めたが、そのひとつとして、テンビー教会管理下の地域に定住するフランドル人たちが享受していた十分の一税免除の特権を撤廃し、教会の収入増大に寄与した。私の推測が当たっているならば、彼は甥たちが職禄だけではなく個人的な収入源まで奪おうとしていると非難していることになる。

- (6) Giraldus [11], pp. 36~37.

furti quoque scelere detestando et quoniam erga nos, conduplicato vos iam irremediabili culpa contaminastis.

- (7) Giraldus [11], pp. 78~81.

pro custode quippe consumptor effectus in fraudes et furta.

- (8) Giraldus [11], pp. 28~29.

quod nunquam vobis benefeceramus set magis redditus vestros vobis aufere volebamus.

- (9) Giraldus [11], pp. 4~5.

tam scelerose contra nos et cum scandalo tanto recalcitrare presumpsit.

- (10) Giraldus [11], pp. 44~45.

statim post promocionem vestram quam procuravimus, ut denuo sermonem ad vos dirigamus, studio et doctore congruo vos assignantes.

- (11) Giraldus [11], pp. 146~147.

quia patris eius optimi et fratris nostri primevi gracia, qui nos inter ultima verba nobis cum lacrimis dicta, pro ipso tam affectuose rogavit.

- (12) Giraldus [11], pp. 24~25.

Cosiderants enim olim indolem puericle vestre tam illaudabilem.

- (13) Giraldus [11], pp. 30~31.

Quid etiam de larvis dicemus et irrisionibus vestris, a quibus corrigi vel castigari vos prava natura non permisit?

- (14) Giraldus (Richter) [11], pp. xxxvi~xxxvii.

- (15) Giraldus (Richter) [11], pp. xlv~xlvi.

第6節

- (16) Giraldus [11], pp. 10~11.

Redditus vestros dicitis quasi per probitatem vestram adquisitos.

- (17) Giraldus [11], pp. 28~29.

reditus vestros cito in manu vestra habere volebatis et sub custodia senis illius non amplius esse sustinendo.

- (18) Giraldus [11], pp. 160~163.

epistram nostram nepoti nostro transmissam ut fertur, libellum vocant.

- (19) Giraldus [11], pp. 116~119.

Ceperunt etiam ambo, doctor et discipulus acriter in hoc discessu suo comminationes contra nos emitte multas.

- (20) Giraldus [11], p. xxvi.

- (21) Giraldus [11], pp. 28~29.

nos nisi per assensum vestrum..... Walliam intrare vel etiam appropriare non ausos fore. Ideoque voluntati vestre resistere nobis tutum non esse dicens

- (22) Giraldus [11], pp. 78~81.

- (23) Giraldus [11], pp. 96~99.

Quid putat magister Giraldus reditus nostros nobis auferre et nos ita suppeditare?

- (24) Giraldus [11], pp. 214~215.

quod nos apud Neubriam coram archiepiscopo et episcopis plurimis ad perpetuam et liberam archidiaconatus de Brechene et prebende de Martru administrationem nepotis nostril presentatione suscepistis.

- (25) Giraldus [11], pp. 214~215.

Dixistis enim tunc nobis quod presentati quidem vobis fuimus ad dictam administrationem, sed nihil respondistis.

- (26) Giraldus [11], pp. 214~217.

dixistis nobis quod facta vobis presentatione tali coram archiepiscopo de nobis ad illam administrationem respondatis quod talis administratio satis a nepote nostro fieri posset in capitulis suis.

- (27) Richter [58], p. 102.

- (28) Richter [58], p. 123.

- (29) Giraldus [11], pp. 28~31.

ipse nos a Wallie finibus absque dubio procul expellendo fugaret.

第7節

- (30) Giraldus [11], pp. 150~151.

litteras sitas pre minibus et oculis ac secreto tanquam speculum habeatis in quo mores et modos ac gestus vestros inspicere possitis.

- (31) Giraldus [11], pp. 220~221.

minor est rerum iactura quam dierum ; res etenim redent, sed irrevocabiliter tempora pretereunt.

- (32) Giraldus [11], pp. 226~227.

salvo solum honore nostro et dedecore propulsato rerumque dampis etsi
non plene saltem honeste restaurantis.

(33) 『二人の鑑』 附属部分の第 7, 第 8 の手紙。

(34) Bartlett [22], p. 57.

(35) Bartlett [22], p. 220.

(36) Giraldus (Thorpe) [13], pp. 22~23.

(37) Richter {59}, p. 389. ギラルドゥスのものと伝えられる墓がセント・デイヴィズ教会にあるが、これは後代の作である。

第 8 節

(38) この推定が当たっていれば、「ブレコン大助祭問題」の当事者にカンタベリー大司教ウォルターを加えることもできる。ただし、彼は「問題」発生前の 1205 年に死去している。

ギラルドゥス・カンブレシス関連年表

註

(1) * : ギラルドゥス関連事項。 ○南ウェールズ関連事項。 □イングランド関係事項。

(2) ギラルドゥスに関する事項の年については、下記の書物に基づく。

M. Richter: *Giraldus Cambrensis, the growth of the nation*, 1972.

A. Rutherford (ed.): *I, Giraldus, the autobiography of Giraldus Cambrensis*, 2002.

(3) ギラルドゥスの著作に関する情報—書名、執筆年代、現存の版、など—については、下記の書物に基づく。なお、執筆年代は大部分がギラルドゥスの他の著作に含まれる言及からの推定であり、多くの場合かなり大きな時間の幅をもつ。この年表では推定期間の最初の年に記載してある。

R. Bartlett: *Gerald of Wales, 1146~1223*, appendix I, pp. 213~221

1145か46年

* ギラルドゥス、マノルビエで誕生。

1148年

○ セント・デイヴィズ司教バーナードが死去。ギラルドゥスの伯父デイヴィッド・フリッツジェラルドが司教に就任。

1151~53年

○ デハイバース王国がほぼ復興。

1154年

□ ヘンリニ世が即位（在位 1154~1189）。

1155年

○ リース・アップ・グリフィズ（君主リース）がデハイバース王国を単独支配。

□ ヘンリ二世は南北ウェールズの支配を強化。

1158年

○□ リースがヘンリ二世に忠誠を誓う。

1158~59年

○□ リースは反攻を試みるが失敗。

1161年

□ カンタベリー大司教セオバルト・オブ・ベックが死去。

1162年

□ カンタベリー大司教にトマス・ベケットが就任。

1163 年

- 南北ウェールズ人支配者が再度ヘンリ二世に忠誠を誓う。ウッドストックの和睦。

1164 年

- リースを中心にウェールズ人支配者が団結し、領地奪回。

1165 年

- 南・北ウェールズ軍がクロゲンの戦いで勝利。領地拡大。

? 年～1165 年

- * グロスターの教会で聖職者になる教育を受ける。

1165～74 年

- * 第1回パリ留学。リベラル・アーツを研究。

1166～67 年

- 南北ウェールズ人支配者がアングロ・ノルマン領主を攻撃。

1169～70 年

- ウェールズの有力アングロ・ノルマン領主がアイルランドに遠征し定着。
- カンタベリー大司教トマス・ベケットが死去。

1171 年

- リース・アプ・グリフィズはヘンリ二世に忠誠を誓う一方、南ウェールズ最高の支配者という認知を獲得。

1172 年

- ヘンリ二世はリースをデハイバース全域で王の代理を務める justus に任命。

1174 年

- * パリ留学を終えて帰国。
- カンタベリー大司教にリチャード・オヴ・ドゥヴァーが就任。

1174～76 年

- * カンタベリー大司教の代理人として南ウェールズ教会の改革を熱心に進める。
 - ①ロースのフランドル人が免除されていた十分の一税を徴収。
 - ②ペンブローク小修道院の所領奪回を支援。
 - ③妻帯していたブレコン大助祭ジョルダンの解任を推進し実現。

1175 年

- * ブレコン大助祭に就任。

1175～76 年

- * セント・デイヴィズ教会の運営に参加し、同教会の利益を積極的に図る。①南ウェールズ各地にあった俗人の教会所有を摘発し、その所領を同教会へ返却させる。②セント・アザフ司教と対決し、セント・デイヴィズ教会のケリー教会に対する権利を確保。
- オックスフォードの会見でヘンリ二世がリース・アプ・グリフィズの地位

と所領を確認。

1176 年

- * セント・デイヴィズ司教デイヴィッドの死去にともない、次の司教候補に推挙されたが、辞退。この候補選出の手続きをめぐりヘンリニ世の疑いを招く。
- * 後日、ヘンリの真意が、リース・アップ・グリフィズの甥であるギラルドゥスを南ウェールズで最高位の聖職に任命すると王のウェールズ統治に危険を招くという判断にあることを知る。
- ☐ ピーター・ド・レイアがセント・デイヴィズ司教に就任。
- ☐ ロンドンの宗教会議でセント・デイヴィズ教会が大司教座権を主張。しかし、ギラルドゥスは不参加。

1177 年

- * 再度パリに留学。リベラル・アーツ、教会法、ローマ法を研究。
- ☐ リースはオックスフォードでヘンリ二世に忠誠の礼をとり、1175年の取り決めに再確認。

1178 年

- ☐ ヘンリ二世が南ウェールズのアングロ・ノルマン領主の動きを抑制。

1179 年

- ☐ リース・アップ・グリフィズの息子たちの利己的行動で南ウェールズは混乱状態。
- * パリ留学から帰国。
- * ☐ カンタベリー大司教リチャードの依頼でセント・デイヴィズ教会の司教代理となり、同教会の参事会員と司教ピーターとの間で生じた混乱の収拾に努力。その結果ピーターとの対立激化。

1182 年

- * ☐ 司教代理の職を辞任。

1183 年

- * アイルランドを訪問。

1184 年

- ☐ 南ウェールズで混乱状態が続く。ウースターの会見でリース・アップ・グリフィズはヘンリ二世に治安回復を約束したが失敗。
- ☐ カンタベリー大司教リチャード・オヴ・ドーフヴァーが死去。ボードウィンが次期大司教に就任。
- * ☐ ヘンリ二世の要請を受け、王宮付き司祭に就任。以後1194年まで王の対ウェールズ政策を助ける。
- * ☐ 大司教ボードウィンをリースに引き合わせ。

1185～86 年

- * ☐ イングランド王子ジョンのアイルランド遠征に同行し、ジョンの帰国後も

1 年余り滞留。

1187 か 88 年

- * *Topographia Hibernica* をオックスフォードで発表。以後、おそらくギラルドゥス自身が 3 回の改定し、4 種の版が現存。

1188 年

- * ☐ 十字軍勸奨のため大司教ボードウィンに従いウェールズを巡行。
- * *Expugnatio Hibernica* を発表。以後、ギラルドゥス自身が 2 回加筆し、3 種の版が現存。

1189 年

- ☐ ヘンリ二世が死去。リチャード一世が即位（在位 1189～1199）。
- ☐ ウェールズのアングロ・ノルマン領主達に失地回復の動き。
- ☐ リース・アプ・グリフィズは攻勢に出て、勢力拡大をはかる。息子たちの利己的行動が激化。

1190 年

- * 1190 年代から 1217 年の間に *De Principis Instructione* の執筆。1 つの版のみ現存。
- ☐ カンタベリー大司教ボードウィンが死去。

1191 年

- * *Itinerarium Kambriae* を発表。以後、ギラルドゥス自身が 1197, 1214 年に改訂し、3 種の版が現存。*Speculum Ecclesiae* の執筆を開始。完成は 1219 年以後。1 つの版のみ現存。
- ☐ レジナルド・フィツジョスリンがカンタベリー大司教に就任。同年中に死去。

1193 年

- ☐ カンタベリー大司教にハーバート・ウォルターが就任。

1194 年

- * イングランド王宮を離れ、ヘレフォードで著述に専念。
- * *Descriptio Kambriae* と *Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi* を発表。前者は 1215 年に改訂され、2 種類の版が現存。後者は 1 つの版のみ現存。

1195 年

- * *De Vita Galfridi Archiepiscopi Eboracensis* と *Vita Sancti Ethelberti* を発表。両者とも 1 つの版のみ現存。

1196 年

- * バリ留学を計画するが、英仏間の戦争で断念。リンカーンで著述に専念。
- ☐ リースが南ウェールズ東部国境域にまで進軍。生涯最大の支配域を獲得。

1197 年

- * *Gemma Ecclesiastica* を発表。1199 年に教皇インノケンティウス三世へ献呈し、賛辞を得る。以後、ギラルドゥス自身が 1 度改訂し、2 版存在していたが、

現存するのは第2版のみ。第2版の作成年代はギラルドゥス後半生期。

Itinerarium Kambriae を改訂し、第2版を作成。

- セント・デイヴィズ司教ピーターがリース・アップ・グリフィズを破門。
- リースが死去。(4月)

1198年

- ウェールズの軍勢がペインキャッスルの戦いでアングロ・ノルマン軍に大敗。
- *○ セント・デイヴィズ司教ピーターが死去。(7月) 次期司教選出作業開始。
- * *Vita Sancti Karadoci* を執筆し、翌年にローマへ持参。この書は現存せず。
- *□ イングランド王宮に対し2人の司教候補を推薦。自身は含めていない。(10月)

1199年

- リチャード一世が死去。ジョンが即位(在位 1199~1216)。
- * *Symbolum Electorum* を執筆。1つの版のみ現存。
- *□ カンタベリー大司教に対して、セント・デイヴィズ教会はギラルドゥスを司教候補に推挙。(1月) しかし、王ジョンは最終的に彼を拒否。
- *○□ 居住地をセント・デイヴィズに移し、同教会の作戦を直接指揮。イングリランド王宮との戦い開始。
- *○ セント・デイヴィズ教会は次の3方針を決定。①次期司教候補はギラルドゥスのみ。②ギラルドゥスはローマ教皇の聖別を得て司教に就任。③同教会の大司教座権復活を教皇に要請。(6月)
- * アイルランドを訪問し、親類、友人に支援を要請。(夏)
- イングランド王宮はジョフレイ・ド・ヘンロウを司教候補とし、セント・デイヴィズ教会に受諾を強要。
- *○□ 教皇の裁定を求めてローマへ。(8月) カンタベリー大司教の使者もローマ到着。

1200年

- *○□ 教皇インノケンティウス三世の審議開始(1月)。大司教の手紙が読み上げられ、ギラルドゥスは大司教の主張に逐一反論。
- * 教皇庁文書館でセント・デイヴィズ教会の大司教座権に関する資料を探索。
- * *Invectiones* の執筆開始。第1部はこの年に完成。以後、1202年まで第2~第4部が書き継がれ、第5部は1203年以降に執筆、第6部をくわえて完成したのは1216年以降。1つの版のみ現存。
- カンタベリー大司教が手紙で、セント・デイヴィズの新司教はウォルターに決定したと教皇に報告。教皇はこれを却下。(春)
- *○ 教皇がセント・デイヴィズ教会における司教候補決定手続きの有効性を確認することを約束。その間同教会の管理をギラルドゥスに依頼。

- * ローマを離れ帰国。(夏)
- カンタベリー大司教がセント・デイヴィズ教会員に働きかけ、内部分裂を画策。王ジョンも最終的にギラルドゥス排除を決意。(秋)
- * 大司教はギラルドゥスに大司教座権要求の取り下げを条件とする妥協案を提示。ギラルドゥスは拒否。
- * セント・デイヴィズ教会で司教バーナードによる大司教座権要請の記録を発見。

1201 年

- カンタベリー大司教がグロスターでセント・デイヴィズ教会員と面談。教会員たちはギラルドゥスを次期司教候補に指名したことはないと否定。(年初)
- * セント・デイヴィズ教会次期司教について教皇の裁定を受けるため、再びローマへ。(春)
- セント・デイヴィズ教会の代表者が教皇の面前で、ギラルドゥスを司教候補として選出していないと証言。教皇は審議の延期を決め、同教会の過半がギラルドゥスを支持する場合にのみ審議再開を約束。
- * ローマを離れ、帰国。(夏)
- 王ジョンが教皇への手紙の中でギラルドゥスを反逆者と呼ぶ。(秋)

1202 年

- * 教皇の使者が主宰してセント・デイヴィズ教会での審議。ギラルドゥスと同教会代表者はそれぞれ前年の主張を繰り返す。(秋)
- * □ 教皇の使者に、カンタベリー大司教の支配下でセント・デイヴィズ教会を大司教座とするというに妥協案提出。大司教は拒否。(9 月)
- * セント・デイヴィズ教会次期司教に関する教皇の裁定を得るためにローマへ。

1203 年

- * □○ 教皇が、1199 年に行われたという 2 つの司教候補選出をともに無効とする最終判定を下す。結果的にギラルドゥス主張を否認し、イングランド王宮の主張を黙認。(4 月)
- * セント・デイヴィズ教会は改めて司教候補を選出。当初はギラルドゥスも含まれていたが、間もなく削除。
- カンタベリー大司教は新候補をすべて拒否し、ジョfrey・ド・ヘンロウを新司教として聖別。(11 月)
- * 王ジョンはギラルドゥスを王国の敵と呼ぶ。
- * □ ギラルドゥスが大司教の和睦案を受諾。セント・デイヴィズ教会の大司教座権の主張を繰り返さず、甥ギラルドゥスにブレコン大助祭の職を譲るという条件で王の許しを得る。(12 月)
- セント・デイヴィズ教会の大司教座昇格の可能性は消滅。
- * *Invectiones* の第 5, 6 部の執筆開始。

1204年～1205年

- * アイルランド訪問。

1205年

- * 1205年から15年の間に *De Fidei Fructu Fideique Defensu* を執筆。現存せず。
- カンタベリー大司教ハーバート・ウォルターが死去。次期司教にレジナルドが就任。

1206年

- * ローマ巡礼の旅。
- カンタベリー大司教レジナルドが死去。次期大司教にジョン・ド・グレイが就任。同年中にジョンも死去。スティヴン・ラングトンが後継大司教に就任。

1207年

- * リンカーンに定住して著作活動に専念。
- * 王ジョンがギラルドゥスに対してセント・デイヴィズ教会の独立要請をしてはどうかという示唆を与えたが、ギラルドゥスは断る。

1208年

- * 甥ギラルドゥスとブレコン大助祭職禄の分配をめぐる争う。
- * *De Rebus a Se Gestis* と *Speculum Duorum* の執筆開始。両書とも2116年までには完成。ともに1つの版のみ現存。

1211年

- * 甥との争いに敗北したことを示唆。

1213年

- * *Vita Sancti Hugonis* の第1, 2部を執筆。以後, 1219年までの間に第3部を執筆。両者をあわせて1つの版のみ現存。*Vita Sancti Remigii* の第2版を作成。

1214年

- * *Itinerarium Kambriae* を改訂し, 第3版を作成。
- セント・デイヴィズ司教ジョフレイ・ド・ヘンロウが死去。
- * セント・デイヴィズ教会内でギラルドゥスを次期司教に推す動きがあったが, 断る。

1215年

- イオルウェルスがセント・デイヴィズ司教に就任。
- * *Descriptio Kambriae* を改訂し, 第2版を作成。

1216年

- * *Invectiones* 完成。この後, 同書からの抜粋・要約で構成した *De Giraldo Archidiacono Menevensi* の執筆。1つの版のみ現存。
- セント・デイヴィズ司教にイオルウェルス・ゲルヴェイスが就任。

1217 年

- * *Catalogue Brevior Librorum Suorum* と *Retractiones* を執筆。ともに1つの版のみ現存。

1218 年

- * *De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae* を執筆。2つの版が現存。ひとつはおそらくギラルドゥス自身による要約版。

1220 年

- * *Epistola ad Stephanum Langton* と *Epistola ad Capitulum Herefordense de Libris a Se Scriptis* を執筆。ともに1つの版のみ現存。これらの書簡の中でギラルドゥスは現在では失われてしまった自作の地図 *Mappa Kambriae* に言及。

1222 年か 1223 年

- * おそらくリンカーンで死去。